

---

BLACK D T

笹舟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLACK D T

### 【NZコード】

N9287Y

### 【作者名】

笹舟

### 【あらすじ】

『雨と地元を嫌っているテンション低めの女子高生』である主人公。いつものように雨に対して憂鬱を感じていたその日、とあることから『変な名前の』生徒会長と会話することに。

「あ、大丈夫だよ。生徒会長の名にかけて、不純異性交遊なんてしないから」

そう言つてのける彼に手を引かれ、雨の降るなか連れて行かれた先是。

特別なことは何も起らなかった、学生生活の日々としたお話を下さい。

BLACK D T

マンガやドラマで、登場人物が雨に打たれて佇むシーンが出てくると、それがどんなに面白い話でも、途端にマイナスな気持ちが浮かんでくる。正直「馬鹿じゃないの」とさえ思ってしまう。私がそれらの話に登場するとしたら、戦いに敗れてどれだけ悔しさが募つていようとも、突然恋人に別れを告げられてどれだけ呆然としていようとも、雨が降り出したらすぐに屋根のあるところまで走るだらう。絶対に。

私は雨が嫌いだ。大、をつけてもいい。

雨についてのトラウマがある、なんて事情は無く、ただ純粋に雨を嫌っている。

朝起きた時に窓に雨が当たる音が聞こえてくると、まず軽く怒りが湧く。登校しなくてはいけない平日は特に、だ。そして靴や制服が濡れることを考えて憂鬱になり、ただでさえ低めだと友人から称されているテンションが下がる。

服や靴だけじゃなく、雨になると手に持つ鞄だって濡れてしまう。その鞄の中に本が入っている時なんて、最悪の極みだ。考えただけで嫌になる。私は自他共に認める読書家であり、ついでにいうなら学校では図書委員をしている。

大体、心から雨が大好きだという人はそうそう居ないと思う。

中学生の時のクラスメイトの中に「私、雨が好きなの」とか言っていた女子が居た。けれどそのままだつて、帰り際に雨が降り出した時には「うわ……」と顔を歪めていた。その後に口にした言葉は「親に迎えに来てって頼もうかなあ」だ。

それ以来、雨が好きなどと公言している人を見かけると「それってキャラ作りじゃないの？」と心の中で思うようになった。

本当に雨が好きだという人だってそりやあ居るかもしれないし、その人には私の考えは失礼だろう。でも、あの時にあのクラスメイトが満面の笑みを浮かべたりなんてしていても、それはそれでドン引きしていたと思う。距離的にも精神的にも確実に。

私の中では、雨が好きと言っているのはゴキブリが好きと言っているのと同じぐらいだと思つていて。極端な例かもしけれど、つまりはそれだけ考えが理解し難いということだ。恵みの雨だろうが何だろうが、嫌いなものは嫌いなのである。

ここまで宣言してきた通り、私は雨がとても嫌い。

それだというのに、私の地元では雨がよく降る。

だから私は、私の地元も嫌つている。見事な三段論法だ。

雨と地元を嫌つっている、テンション低めの女子高生。

そんな私が、『雨が降る地元の商店街で』、という、あまり芳しくないシチュエーションで出会つた店がある。出会つたといふか、出会わされたといふか、出会わせてもらつたといふかはとても微妙な境だけど……それに何の因果だろうか、その店と出会つきつけをつくつた人物は、名前に『雨』という字を冠している人だったりもする。

さて。

これは、その人とその店に出会つてからの私の話である。

雨と地元を嫌つているテンション低めの女子高生、つまり笠見颯子である私の話。

その私が、それからどうなつたか。どうもならなかつたのか。月並みで三流、ありがちな言い回しだけど、

それは読んでのお楽しみ、

۲۰۱۷-۱۴۳۶

六月十日 くもり 時々 。

今日で雨へのマイナスイメージが更に上がった。

「最悪だ……」

私は鞄に入れていたタオルを取り出して、本を包んだ。

今日は朝から曇り空だった。

午前中の降水確率は八〇パーセント。傘はこのあいだ壊れたばかり。今週から新しい靴を履き始めている。シャーペンの芯がもうすぐ無くなるけど、それを除けば今月欲しいものは特に発売されないので、財布の中には余裕がある。

普段は徒步で学校に向かっている私は、今日はバスに乗ろうと決めた。

バスに乗ると決めたら、家を出るまでの時間に開きが出来た。その間に、先日母さんが買っててくれた本を少し読む。第一章がもうすぐで終わるという微妙なところで時間になつたため、続きをバスの中で読もうと手に取つたままバス停に向かつた。

私と同じような考えをしたらしい、バス停には何人かの制服姿が並んでいた。この辺りの住宅地には同じ学校に通う学生が多く住んでいる。

やがてやつてきたバスに乗り込み、中央から前よりの席を確保、腰を下ろした丁度その時にバスの窓に雨粒が弾けた。それを皮切りに弱めの雨が降り始める。

家を出る時はまだ降つてきていたせいで傘を持つてくるのを失念していたことに気付き、しかしそもそも愛用の傘は踏んで壊してしまったところだったということに思い至る。うんざりとしながら、バス停から学校までの一〇〇メートルは走るしかないかと仕

方なく覚悟を決めた。

それからは、持っていた本へとすっかり意識を移して、その内容にのめり込んでいった。商店街の真ん中を走っている時に一度顔を上げた以外は、延々を活字に眼を通して過ごす。

停まる度に学生の増えていったバスが、学校に一番近いバス停（名前もそのまま北第一高校前である）に到着した時には、雨は小雨と呼べる程度にまで弱まっていた。

バスが止まると同時に学生が一斉に立ち上がる。手のひらに準備していた小銭を運賃箱に落として、バスから吐き出されていく。行列の中に揉まれるようにして私も降りた。

私がバスを降りて数歩歩いたとき、いきなり雨足が強くなつてきた。

ほんの一〇〇メートルくらい、しつかり抱えていれば大丈夫だろうとタカをくくつて、私は手に本を持ったままだった。しかし激しくなってきた雨粒にこれは危険だと判断を変えた。

慌てて本を鞄の中に入れようと道の脇に立ち止まって、

ステップから降りる勢いのまま駆け出した学生とぶつかり、私は本を取り落とした。

思わず私は小さく叫んでしまった。「あ、悪い」と一言残して去つていった男子学生に眼は向けず、すぐに本を拾い上げる。指に伝わるふやけたような感触に、頭の奥が重くなる。

数秒だけ鞄に入れるか迷い、それよりもこれ以上雨に打たれないようにな、とぶつかった男子学生の後を追うように学校に向けて走り出した。走り出した頃には怒りが湧き上がっていたから、その学生が私の方をちらりとでも振り返っていたら、後ろを走る私の表情を見て「殺される！」とでも思っていたかもしれない。

急に立ち止まつた私に非が無いとは言わないけど、でも、嗚呼…。

そして今に至り、怒りは哀しみに変化していた。

「」の時間になると、大体の生徒は登校し終えている。生徒玄関には、本の水気を吸い取ろうとその落とした本を包んだタオルにぎゅうつと力を込めている私の姿しかない。

「ああもう……ほんとに……、最悪だ……」

ため息について、タオルを開いてみる。表紙はすっかり波打つていた。布製の文庫カバーでもしていれば良かったのだが、この本には紙のカバーさえかけていない。

母さんは本を買うときにカバーを断るタイプの人で、母さんが買つてきてくれたこの本もそれに違わない。曰く、「下手な店員がするぐらいなら、むしろ、してもらわない方がいい」らしい。それは私も賛成で、ただし「むしろ」の続きには「自分でする」がつく。だから書店でかけてもらわずにカバーを貰つて自分でかけているけど、残念なことに母さんはカバーをすることにこだわってはおらず、わざわざカバーを貰いはしない。

ふやふやになつた表面を撫でて、その凹凸に悲しくなる。  
何度目かの、最悪だ、を口にしようとした時、

「ああーもおー、そこそこ悪だーっ」

妙なことを叫びながら、アマガエルが飛び込んできた。

いや、その雨合羽の色合いが見事にアマガエル色だったために、一秒钟くらいは本気でそう思つたけど、そのアマガエルは、入学してまだ二ヶ月しか経っていない私でも名前を知つてゐる男子学生の姿だった。

理由は二つ、その男子学生は『変な名前』の『生徒会長』だからである。

## 六月十日 くもり 時々 。その2

この北第一高校、通称「北一」は、東高校と県で三番田争いを展開中の進学校だ。

ちなみにもう一つの北高校である北第一高校は、卒業後に就職を考えている生徒が半数を占める総合学科となっている。

しかし、県で三番田（〇・四番田）の進学校と言えど、北一はガリ勉が集まつたテスト三昧の学びの舎、ではない。私がここに入学したのも、進学を考えてではなかつた。

登校にわざわざ駅を超えるのが面倒だったこと、徒歩數十分の場所にここがあつたこと、中学三年の時に担任から「北一はどうだ?」と提案されたこと、少々頑張つてみれば学力も何とかなりそうだったこと、学校説明に来た校長先生が良さそうな人だったこと、制服がそれなりに悪くなかったことが重なり、他の高校と並べて考えた末に、私は北一を選んだのだ。

ただしその「勉強漬けではない」というのは、今の私が北一に入りたての新入生だから、そう感じているだけなのかもしれない。そこで話はちょっとだけ軸に戻る。

北一の生徒会長は、大体は一年生が務める。

三年になつたら勉強の日々、というのは、北一の一年・二年の生徒だけでなく、北一の教員もがよく口にする文句である。

北一では、二年生に進級すると、進学に向けての準備として委員会からも生徒会からも退会するのが、通例になつていて（らしい）のだ。部活動は夏にあるそれぞれの大会が終わるまでは所属していられる（らしい）けど、生徒会長などの役も本人が希望しない限りそこで代替わりをする（らしい）。そして「今までそうだったから、なんとなく」というもの（らしい）とはいえ、通例をわざわざ破つ

てまで役を続けたいといつ生徒は少ない（らしく）。

すべて、伝え聞いた話によると、である。

これから一年先のこと、私はまだそこまで興味も実感も沸いていない。

で、よつやく本筋に戻るとするところアマガエル。失敬、生徒会長。

彼は北一の一年生で、苗字は中谷といい、名前は雨に里と書いて『うり』と読む。その変わった名前を、新入生のほとんどは入学式から忘れたことが無いだろう。

入学式の歓迎の挨拶の時、彼の名前は呼ばれた。

いつも眠たげな顔をしている教頭の「生徒会長、中谷雨里」という声がマイクを通して体育館に響いた途端、ステージの前に並んだ新入生たちと、後ろの方でパイプ椅子に座っている保護者たちの間には、

「うり?」「名前なの?」「うりって言つた?」「読み間違い?」  
と、ちょっとした動搖と驚きの声がさわめいた。

そんな中、壇上でスタンンドマイクの高さを調整し終えた彼は、開口一番、

「変な名前だよね。でも、おかげで覚えてもらえやすいかな

」そう言って、私たち新入生にニッと笑いかけた。

その後はポケットから紙を取り出して「新入生の皆さん。ご入学、おめでとうございます」と、その紙に書かれているのであらう、よくある言葉が並んだ文章を読み上げ始めたものの、第一声に新入生を歓迎する「ようこそ」でも、新入生を祝う「おめでとう」でもない言葉を向けられるとは思わなかつた。

しかもそれが自分の名前を貶す言葉とは。

まあ本人の言うとおり、おかげで入学一日目にして、その名前は  
ばっちりと私の記憶に刻み込まれたし、クラスメイトたちも、  
「すごい名前だよね」  
「っていうか、ふつう自分で言う?」  
と、インパクトを受けたようだった。

六月十日 くもり 時々 。その3

回想から思考を現在へと戻すと、中谷会長は雨合羽を脱ぎ始めていた。

その姿がアマガエルから学生へと変わっていくのを見ていると、脱皮という言葉が浮かんだ。カエルは脱皮をしないけど。それくらいは知っているけど。

「あつれ。一年生?」

気付かれた。

脱いだ雨合羽をぱつさぱつさと勢いよく振り、玄関の外に水滴を飛ばしながら中谷会長が私に尋ねる。露骨に眺め過ぎていたんだろうか。

私は頷いて答えた。

「一年です」

「もしかして、ロッカーの場所、わかんない?」

「あ、いえ」

北一では、生徒一人につき一つの縦長ロッカーが与えられている。更衣室などでよく見られる、無骨なスチールのよくあるアレだ。

生徒はその個人口ッカーに付属のスチール盤を掛け渡して棚状にし、体操服を入れておく、教科書をそこに納める、などと三年間活用する。鍵もついているため、登校中に聴いているM'Dプレイヤーなどの貴重品を管理しておくのにも便利だ。

しかし、ロッカールームには全校生徒分の同じロッカーがずらりと並んでいる上に、ネームプレートは付いていない。一年生のロッカーだけはクラスと出席番号の書かれたシールが貼つてあるものの、慣れるまでは探すのに一苦労だった。

「大丈夫です」

そう、一苦労、だつた。

入学して二ヶ月経ち、ロッカーに教科書も体操服も保管しているのが常となつた今では、さすがにロッカーの位置くらい把握している。一苦労、は既に過去形なのだ。

心中ではそう思いつつも、それでも一応は「お気遣いありがとうございます」というつもりで、首を前に出す程度に頭を下げた。中谷会長は雨合羽を振るのを止め、シューーズを脱ぎ片手に持つと「だよねえ」と笑つた。

「二ヶ月も経てば慣れるよねえ」

だつたら訊くな。

置いていたスポーツバックを肩にかけると、中谷会長は一年の靴箱が並ぶ方へと足を進めていった。分からないと言つたら連れて行つてくれたのか、と何処か欣然としない気持ちを抱えつつ、ローファーを上履きに履き替えた私もロッカールームに向かう。今日の授業で使う教科書を二階の教室まで持つて上がるなければならない。

ロッカーの鍵を開けながら、もう一度本を撫でてみた。

それはもう乾いていたけど、濡れた表紙はやっぱり波打つたままだつた。

長編の物語を文庫にしたものだから、ページは厚めで、値段もそれに比例して高めで、ずっと読みたいと思つていたけど手が出しつくて、それを察した母さんが先日買ってくれた本だ。まだ、読み始めたばかりなのに。

「……やつぱり最悪だ……」

諦めきれない思いを口に出した瞬間、

「勿体無くない?」

今まで視界に無かつた鮮やかな色がぬつと現れて、思わず仰け反つた。

「最悪つて、『最も悪い』だよ。『悪い』の中での、『最も』。」

番悪いんだよ。ショックの原因が何なのかは知らないけどさ、今『最も悪い』って表現を使っちゃう?」

「ああ。アマガエル色だ、これ。

「人生は結構長いよ、たぶん」  
変な名前の中谷会長は自分で頷きながら笑った。自分の考えを懸命に説明してくれたんだろうけど、そうですか、としか私には思ひようがない。

驚いたことに、私と中谷会長のロッカーは隣同士だつたらしい。私のロッカーが一年列の折り返しの場所であり、右隣からは二年専用のロッカーだということは知っていた。だけど誰の物なのかは今まで知らなかつたし、興味も無かつたから知りうともしていなかつた。……でも今日のために知つておくべきだつたのかもしれない。アマガエルの出現で驚いてから、未だに私の動悸は治まってない。

雨合羽を抱えた中谷会長は「隣?」と私のロッカーを見て一度眉を上げ、自分のロッカーの鍵穴に鍵を差し込んだ。その鍵についていたストラップもカエルだつた。

「あ、でもさ、英語の例文で『第九は音楽界で最も有名な曲の一つだ』とかつてあるよね。最もって、いくつもあつてもいいってことかな。どうなんだろ」

生徒会長は思い出したようにそう言いながら、開いたロッカーからはプラスチックのハンガーを取り出した。そのハンガーに雨合羽をかけると、教科書類を出すことなく、またロッカーに鍵を閉める。そして「ね?」とこちらに視線を向けた。

いや、そんなの私に訊かれても。

そう思いながらも、当たり障り無く、気になるところですねとだけ返して私は自分の教科書を取り出した。すぐにロッカーを閉める。「じゃあね、授業頑張つて」「……どうも」

別れ際までフレンドリーな人だ。きっとたくさんの友達が居るんだろう。

でも、私にとってこういう人は、正直対応に困る相手だ。  
学年が違えば、あまり顔を合わせることもない。一言の会話もないまま、どちらかが卒業することだってある。例えば部活動などの関わりあう機会が無ければ、「先輩」と「後輩」の関係ってそんなものじゃないだろうか。

そして私は、今まで中谷会長と話したこともなかつた。それなのに、朝、玄関で顔を合わせただけの後輩にあれだけ親しく接することは。

この学校の生徒会長は、名前だけでなく、性格もちょっと変なのがもしかれない。

そんなことを考えながら、ロッカールームを離れて足早に廊下を歩いた。

一応断つておくけど、別に中谷会長から逃げようと思つたんじやない。

となるとひじてこるとホームルームに間に合つてそつとなかったからだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9287y/>

---

BLACK D T

2011年11月29日16時48分発行